

それなしではそもそも「わたし」というものがありません。この身体を、わたしは単純な物体として経験しているわけではない。また他人の身体はときに純然たるオブジェ(客体)として経験されることもあるが、じぶんの身体となると、奇妙なことに、わたしたちはどうも平穏な気持ちでそれにかかわることができないようだ。たとえばじぶんの映ったスナップ写真を見ると、あるいはカセット・テープでじぶんの声を聞くと、わたしたちはゾクゾクに、「ちょっと違う」といった否定的な感情に襲われ、落ち着きをなくす。あるいは鏡のなかのじぶんの「ぞきこんでいるときに、その場面を他人にモクグキされると、何かいけな

ことをしていたかのように狼狽してしまう。

わたしはじぶんの身体、じぶんの存在の輪郭をじぶんで直接確認できない。要するに、わたしの身体はいつもなんらかの「解釈」を通してしか、あるいはひとつの「イメージ」としてしか所有できないものである。そしてわたしたちがじぶんの身体を意識するときのあの意識のこわばりないしは屈折は、このようにわたしたちがじぶんの存在には直接近づけないまま、しかも他者にはあまりにもあからさまに晒されているという、そういうアンバランスからくる不安に起因しているようにおもわれる。

ヘアスタイルや化粧、ひげそりに始まって、ハイヒールやペディキュアにいたるまで、わたしたちの身体の部分でなんの加工も施されていない箇所はほとんどない、と言ってもカゴンはないだろう。どうしても大きな理由は、わたしたちの存在の中心に巣食うこうした不安にありそうだ。わたしたちは「解釈」を通じてしか、あるいはひとつの「イメージ」としてしかじぶんの身体的な存在を手に入れることができない。その意味で、わたしたちの存在は自己解釈というものを媒介としてはじめて可能になるといえる。ところがこの自己解釈は往々にして他者によって否認される。ことわたしの可視性に関するかぎり、他者はこのわたし自身よりもはるかに近くにいるわけだから、わたしの自己解釈と他者の証言とが食い違えば、修正しなければならぬのは明らかにわたしの解釈のほうである。わたしの存在が解釈によって支えられているかぎり、解釈が破綻すれば、わたしの存在はたちまちぐらつくしかない。そこで両者のあいだに決定的な齟齬が生じないように、わたしはいつもじぶんの可視性(「外見」をじぶんでコントロールしておく必要がある。不意を襲うような解釈をあらかじめ封じ込めるためである。化粧や着衣の行為はこのように、わたしが「わたし」となるために不可欠な戦略的「操作」のひとつである。

空欄に適切な表現を考えて記せ。

わたしたちが のはどうしてだろうか。

じぶんの身体に平穏は気持ちでかかわれないとでまない

それは、じぶんの身体が、じぶんで直接認識できないのに、他者にはあからさまに晒されているという不安に起因する。

じぶんの身体は、自己解釈を通してイメージとしてしか認識できない。そこでわたしたちは、この自己解釈が他者から否定されないように、じぶんの可視性をコントロールする。

自分の身体は自分で直接確認できない／何らかの解釈を通してしか見えない

自己解釈

でも、他者は、自分自身より私、私、存在をよく見る

ことである。

他者と自分で意見が食い違ふとき、他者のあつた信憑性が高い

↓私の意見を修正しなければならぬ

私の存在は自己解釈でまわっている

自己解釈を修正しなければならぬ存在が不安定に

↓他者との食い違ひを避けるため、自分をコントロール(化粧とか)をする。

余は好意の干乾びた社会に存在する自分を基だきこなく感じた。人が自分に対して相応の義務を尽くしてくれるのは無論ありがたい。けれども義務とは仕事に忠実なる意味で、人間を相手に取った言葉でも何でもない。従って義務の結果に浴する自分は、ありがたいと思いつつも、ガソリンの念を起しにくく。それが好意となると、相手の所作が一挙一動、悉く自分を目的にしている、活物の自分にその一挙一動が悉く応える。其所に互いを繋ぐ暖かい糸が、器機的な世を頼もしく思わせる。

「義務さへ素直には尽くしてくれる人のない世の中に、自分の義務さへ碌に尽くもしない世の中に、こんな状況と並べるのは過分である。今の青年は、筆を執っても、口を開いても、身を動かしても、悉く「自我の主張」を根本義にしている。それほど世の中は切り詰められたのである。

こうは解釈するようなもの、イゼンとして余は常に好意の干乾びた社会に存在する自分を基だきこなく感じた。自分が人に向かっているときこなく振る舞いつつあるにもかかわらず、自らを基だきこなく感じた。そうして病に罹った。そうして病の重い間、このきこなきを何処へか忘れた。

看護婦は粥を調味料と混ぜ合わせて、一匙ずつ自分の口に運んでくれた。余は雀の子か鳥の子のような心持ちがした。医師は病の遠さがるに連れて、殆ど五日目位ごとに、余のために食事の献立表を作った。ある時は三通りも四通りも作って、一番病人に好さそうなものを選んで、あとはそれぎり反故にした。

医師は職業である。看護婦も職業である。礼も取れば、報酬も受ける。ただで世話をしていない事は勿論である。彼らを以て、単に金銭を得るが故に、その義務に忠実なるのみと解釈すれば、まことに器機的で、実も蓋もない話である。けれども彼らの義務の中に、半分の好意を溶き込んで、それを病人の眼から透かして見たら、彼らの所作がどれほど尊くなるか分らない。病人は彼らのもたらす一点の好意によって、急に生きて来るからである。余は当時そう解釈して独りで嬉しかった。

子供と違って大人は、なまじい一つの物を十筋二十筋の文から出来たように見窮める力があるから、生活の基礎となるべき純潔な感情を恣に吸収する場合は極めて少ない。本心に嬉しかった、本心にありがたかった、本心に尊かったと、生涯に何度思えるか、ガソリンがすればいくともない。たとい純潔でなくても、自分に活力を添えた当時の感情を、余はそのまま長く余の心臓の真中に保存したいと願っている。そうしてこの感情が遠からず単に一片の記憶と変化してしまいうようなのを切に恐れている。——好意の干乾びた社会に存在する自分を基だきこなく感ずるからである。

空欄に適当な表現を考えて記せ。

話題

余は好意の干乾びた社会に存在する自分を基だきこなく感じた。そして病に罹ったが、病の間はきこなきを忘れた。

主張

それは、からである。

医師や看護婦の行為は好意を溶かしたものに感じられた。

考察

そのとき余は、本心にありがたいと感じ、活力を得た。そのときの気持ちを忘れたくはない。

いくばくもない、いさう長くはない。

「好意」を義務と見なすことも、果たしていいものに、好意を求めたこと。

傍線1 「こう」は解釈するようなもの。

「今の青年が自我の主張ばかりしている」

切りつめられた、好意の干乾びた社会・器機的な世が原因。

病に患うと……

看護婦や医師の世話で、「義務」ではない「好意」を解釈した。

「余」は、好意はとてつもなくありたいもの、

「余」は、好意はとてつもなくありたいもの、

（好意の干乾びた社会に存在した自分ばかりな人。）

「余」の心に保存したい願っている。

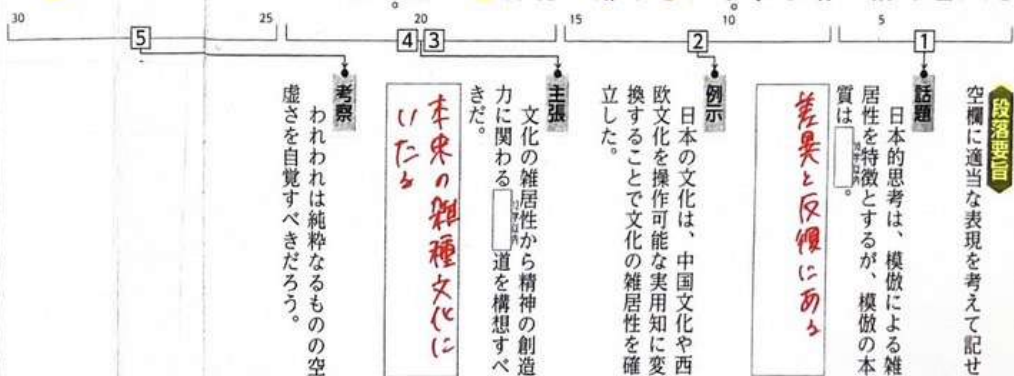
日本の思考は、しばしば、模倣をこととする雑居性を特徴とするといわれる。それは、かつては中国を模倣し、近代では西欧を模倣したといわれる。それがひどくいけないことのようにいわれるのは、
X による。模倣は簡単なことではない。改作なしの模倣などどこにもない。反復はかならず差異化である。差異と反復が模倣の本質である。そうすると、模倣と独創との差異の境界はきわめて小さくなる。西欧諸国の文化は、ギリシアとローマの差異的模倣である。日本の場合にも同様に、中国と西欧の差異的模倣である。差異化には、何らかのオリジナルな改作的工夫が必要である。

日本では、模倣、儒教を儒学に変換し、宗教性をできるかぎり払拭して、操作可能な「知識」へと改作する。これは日本におけるひとつの独自な特徴である。キリスト教であれ何であれ、宗教性がなくなるわけではないが、宗教性は、他国にくらべて限りなく小さくなる。日本では、宗教的イデオロギーが、宗教戦争なしに共存できるが、それは諸宗教がいつのまにか操作可能な、道具性の知識に転換しているからである。またそのゆえに、日本では、ある宗教イデオロギーのなせるわざであり、日本人は古来つねに転向をいやがわしいと感ずる意識は、純粹主義のイデオロギーのなせるわざであり、日本人は古来つねに転向をやり続けてきたのである。古代における中国文化の導入はひとつの転向であったし、そして近代における西欧との出会いは、中国文化から西欧文化への転向を劇的に実現した。すべてを道具的な操作可能な実用知に変換すること、これが日本の文化の雑居性を生み出す原因、いやむしろ精神の鋳型である。

しかし雑居は、そのままだでは雑居性にはたたりはしない。たしかに雑居を許す文化は、雑居を許さない純粹主義文化よりも、雑居性を生む可能性は高い。II それはあくまで環境ないし条件ではあっても、自動的に雑居を生むわけではない。われわれは、雑居環境を存分にいかして、雑居文化という本来の文化のありかたにいたる道を構想しなくてはならない。

雑居は他者の文化を交換する装置が作動した結果をさす用語であり、雑居は精神の創造力に関わる用語である。雑居性は雑居の精神なしにも可能であり、雑居はかならずしも雑居の精神に通ずるものではない。雑居の精神がないままに、他者の文化との出会いを喜び、それを実用知に変換するだけでは、雑居の流行しか生まれないであろう。日本人がタイダイやついでいるのはまさにこれだ。日本人は一般に、雑居性のなかに雑居性を溶解し、雑居の精神を自覚的にバイヨウすることを無視してきたと思われる。

まずは純粹なるものがいかに空虚であるかを自覚してからなくてはならないだろう。なぜなら、かつて一度も、純粹な文化も、純粹な精神も、存在したことはないからである。なるほど、西欧の思想家も東洋の思想家も、純粹幻想に引き回されて、純粹な精神や文化がありうると思ひみなしでそうした純粹な精神世界を根拠づけるような純粹な思惟と純粹な自我をみつけれようと努めてきた経緯はある。そうした懸命の努力のなかから幾多の立派な成果が生みだされたことはあるにせよ、これらの努力を導いた指針がいささかトウサクしていたことも、充分に承認しなくてはなるまい。



日本文化と雑居性を特徴とする

「模倣をする」

純粹主義のイデオロギーにより、ひどくいけないことのように扱われてきた

「模倣の本質は、差異と反復」であり、オリジナルな改作的工夫が必要で簡単なことではない

雑居性の原因は？ ↓ 道具的な操作可能な実用知に変換してきたから。

雑種性(≠雑居性)は精神の創造力に関わる 本来の文化の性質

雑居はそのままでは 雑種 を生まない

↓ 雑種文化 という本来の文化のあり方にいたる道

構想しなくてはならない

また、純粹な文化・精神は存在したことにならない
(現在までの日本人は雑種の精神を自覚的に培養することを目指してきてきた)
↓ 純粹なるものは 空虚 だ。